



荷風の すみださんぽ

墨田区の魅力を伝える

【第1回】2022年9月

『漣東綺譚』の舞台を訪ねて

このサイトのトップページにも書きましたが、明治から昭和にかけて活躍した文豪・永井荷風さんは、“散歩の達人、”でもありました。「荷風さんだったら、今の風景をどう感じるのだろう…」～そんな視点も折り込みながら、すみだの地の魅力を伝えていきたいと思えます。どうぞよろしく、お願いいたします。

「東向島駅」は、かつて「玉ノ井駅」だった

荷風さんの代表作といえば、小説『漣東綺譚』です。さんぽの手始めとして、その舞台となった場所を訪れてみましょう。

最寄り、東武スカイツリーライン「東向島駅」。昔の駅名は「玉ノ井」でした。駅には、今でも「旧玉ノ井」と表示されています。そう、この「玉ノ井(玉の井)」が『漣東綺譚』の舞台なのです。



▲駅のホームの表示板。東向島(旧玉ノ井)と書いてあります。

荷風さんが出迎えてくれる(?)カフェでひと休み

駅からしばらく歩くと「玉ノ井カフェ」に到着。かつて大きな色街(私娼街)があった「玉の井」エリア内の大通り(玉ノ井いろは通り)に面した一角にあります。レトロな雰囲気の内には、永井荷風さんゆかりの書籍が多数陳列されていて、手に取って読むこともできます。



▲「玉ノ井カフェ」外観。



▲お店が閉まっているときは、シャッターに描かれた荷風さんが出迎えてくれます。



▲店内の様子。



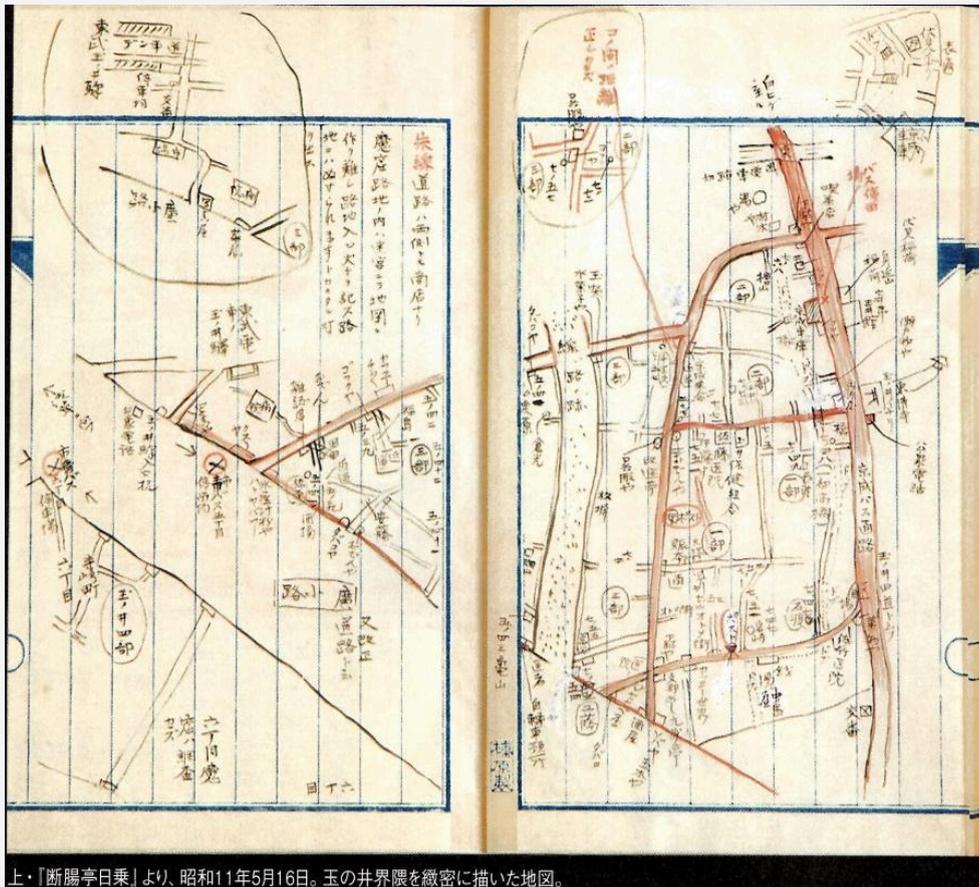
▲荷風さんの著書を眺めながら、「荷風ブレンド」コーヒーとイチジクのケーキ(両方で1,000円)をいただきました。

表通りは、静かな様子。かつて人々が賑やかに往来した風情はなくなり、落ち着いた店内には時間がゆっくりと流れている。そんなひと時を、しみじみと楽しむことができました。

「玉の井」の路地を散策(その1)

ひと休みの後は、「玉の井」があった街をゆっくりと歩いてみます。玉ノ井いろは通りの南側が、往時の中心エリアです。太平洋戦争の空襲で焼け野原になってしまいましたが、複雑に入り組んだ狭い路地はかなり残っています。

『溍東綺譚』と並ぶ荷風さんの代表作といわれるのが、日記文学『断腸亭日乗』です。その1936年9月16日の記述に添付された自筆の地図をご覧ください。



上・「断腸亭日乗」より、昭和11年5月16日。玉の井界隈を緻密に描いた地図。

▲「東京人」(都市出版刊、2017年12月号、19ページ)から引用。紙面の右側が北の方角となります。右ページの右端近く、タテ方向で赤く塗られた「京成バス通路」が、玉ノ井いろは通り。左ページ左端から右ページ中央部に向かって描かれた大通りが、今の水戸街道(国道6号線)です。

右ページの玉ノ井いろは通りと、その左側の赤く塗られたタテ方向の通りに挟まれた一角が、当時最も賑やかだったエリアの1つ。この地が『墨東綺譚』では、こんな描写で登場します。

「…其処(そこ)はもう玉の井の盛場を斜に貫く繁華な横町の半程(なかほど)で、ごたごた建て連った商店の間の路地口には「ぬけられます」とか、「安全通路」とか、「京成バス近道」とか、(中略)など書いた灯がついている」。

当時の線形を残す狭い路地をそぞろ歩いていると、そこに刻まれた往時の雑駁な賑わいなどかつての街の記憶がよみがえってくるような思いです。



▲まさに、荷風さんのいう「ラビラント(迷宮)」のような狭い路地。

「ぬけられます」~かつて路地ごとに掲げられていたらしい案内看板や街灯に記されたフレーズ。おそらく「心配せずどうぞ入っていらっしやい」といった意味だったと思われます。一種のホスピタリティがあふれるメッセージだったようにも思えないでしょうか？



▲ひと休み中の地域ネコと、思わず目が合ってしまった。

「玉の井」の路地を散策(その2)

次に、玉ノ井いろは通りの北側エリアに向かいます。まずは、「東清寺」へ。通りから少し奥まった場所にあります。

『墨東綺譚』の中にも、同寺の石碑や「玉の井稻荷」の鳥居が(参道入口の)玉ノ井いろは通りに建っていることが描写されています。



▲「東清寺」外観。写真中央奥の階段の先が本堂です。禅宗である曹洞宗の寺院で、1915年頃に当地に移転してきたようです。手前に「玉の井稲荷」の表示も見えますが、次の写真をご覧ください。



▲階段を上った本堂手前のスペースの左右には、お稲荷様の石像が。こちらは本堂に向かって右側の「奉」の像。反対側には、「納」の像もあります。

「…この稲荷の縁日は月の二日と二十日の両日である事や、縁日の晩は外ばかり賑(にぎやか)で、路地の中はかえって客足が少いところから、窓の女たちは貧乏稲荷と呼んでいる事などを思出し、人込みに交って、まだ一度も参詣したことのない祠(やしろ)の方へ行って見た」。

～先ほどの(参道入口の)描写に続く、『溼東綺譚』の一節です。「貧乏稲荷」とは、面白い俗称でしょう。写真のように寺院はすっかり現代的な建物になってしまいました。しかし眼を閉じてぼおっとしてみると、荷風さんの時代を追体験しているような感慨に浸ることができました。

玉ノ井いろは通りの北側エリアは、太平洋戦争終戦後に色街として賑やかになったところ。今では住宅などが建ち並んでいますが、かつての雰囲気がいっぱい残る建物がほんの少しだけまだあって、過ぎ去りし「昭和」の残影が思い起こされます。



▲ 玄関の位置や装飾瓦などに、かつての雰囲気が偲べれます。(この建物は、つい最近取り壊されてしまいました)



▲別の建物の一部(窓枠の飾り箇所のみ表示)。

風変りな玄関の位置や装飾瓦の建物、そしてとても洒落たデザインの窓枠など…。当時は「一般の住宅と外観で区別がつくように」との趣旨から、結果的にユニークな建物外観や装飾が生まれた。そんな話を聞いたことがあります。

これも、時代が遺した一種の“建築文化”なのでしょう。街が醸し出す“昭和ノスタルジー”の雰囲気味わっていたら、あっという間に夕暮れ時になっていました。

さんぽの仕上げも「玉の井」エリアで

玉ノ井いろは通りの北側、「鐘ヶ淵駅」との間にやってきました。老舗の居酒屋「十一屋」で晩酌していきましょう。



▲シックな外観。



▲店内も落ち着いた雰囲気です。

まずは生ビール(小、540円)で今日のさんぽにお疲れ様！ かなり歩いたので、のどもカラカラ。あつとい

う間に飲み干してしまいました。

お次は、折角なので地元で「酎ハイ」とか「ボール」と呼ばれ愛されている焼酎ハイボール(300円)を。



▲酎ハイには、新鮮な枝豆(450円)やカレー味がユニークな「マカロニハムサラダ」(410円)がよく合います！

地元の常連さん達で連日賑わう店内ですが、混雑が始まる前においとますることにしましょう。「明太もんじゃグラタン」(630円)をシメに食べて、お店をあとにしました。

今日のさんぽを振り返って

かつて、大勢の人々がひっきりなしに往来した「玉の井」の街。今ではそうした雰囲気は、ほとんど残っていません。

「栄枯盛衰」とか「盛者必衰」。～そんな四文字熟語が思い浮かんでまいります、荷風さんも決して嫌いではなかったフレーズなのでは…。そんな風に思います。

時代は、昭和から平成そして今や、令和の世。今からまた何年か経ったら、この街の様子はどう変わっているのでしょうか？ では、皆さんまたお会いしましょう…。



【お店情報】

※営業時間・定休日は変更となる場合あり。来店前に電話等で確認してください。

玉ノ井カフェ

東京都墨田区東向島5-27-4

TEL:080-2107-1016

営業時間:12:00～18:00

定休日:水・木曜

十一屋

東京都墨田区墨田3-23-17

TEL:03-3611-4881

営業時間:17:00～22:30 ※併設するお好み焼店は閉店時間が異なります。

定休日:水曜

【参考】

東清寺

東京都墨田区墨田3-10-2